

仙台の田植踊と歌舞伎

東北歴史博物館

笠原 信男

1 仙台の田植踊

(1) 現行の田植踊

田植踊は本来、豊作を予祝する正月の門付けの民俗芸能で、米作りを歌と踊りで模擬的に表現する。きらびやかな衣装を身につける芸能で、東北地方独特のものである。団体数は「福島県 140、岩手県 97、山形県 44、宮城県 26、計 307」を数える⁽¹⁾。宮城県で多いのは振り袖姿の早乙女による華やかな田植えの踊で、扇等を苗に見立てる。収穫等の米作り工程を演じるのは少数である。対して、福島県・岩手県・山形県は一年の米作り工程を順序立てて演じるものが目立つ。

宮城県の田植踊は、^{やんじゅうろう}弥十郎が田植を統率し^{さおとめ}早乙女が苗を植える^{てたいこ}弥十郎・早乙女田植と、小さな手太鼓(鞆鼓)を持った^{やっこた}弥十郎もしくは鞆鼓役が中心となる^{うえ}弥十郎・奴田植がある。

弥十郎・早乙女田植は 23 団体あり、うち、8 団体が仙台の田植踊である。その芸態は概ね次である。

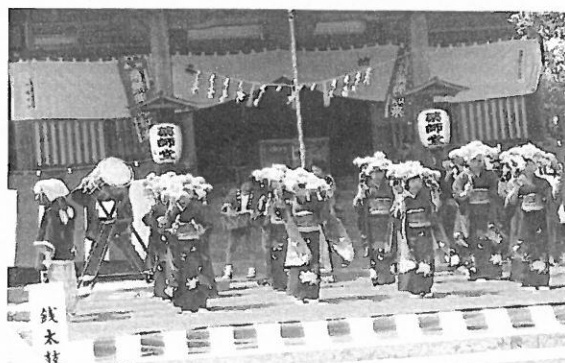
- ・弥十郎は 2 人、早乙女は 5 人以上が多い。
- ・弥十郎は踊りの前口上を行い、踊りの主役は早乙女である。
- ・苗を植える動作を振り付けた複数の本演目がある。
- ・早乙女の持ち物は扇・鈴・^{ぜにたいこ}銭太鼓・^{あやたけ}綾竹等でこれらを苗に見立てている。
- ・本演目の他に余芸がある。

弥十郎・奴田植は 3 団体で、うち仙台に 1 団体ある。かつて、仙台市泉区内に 8 団体ほどが知られていたが、いずれも大正期までに絶えた。大人数で踊り、かつては早乙女田植と双璧とされていた。その芸態は次である。

- ・仙台市泉区で行われていた奴田植踊はエブリスリ 3 (うち^{たゆう}太夫 1・弥十郎 2)、馬役 2、^{やっこ}奴 12、^{やくにん}躍人 8、早

県南系		5
仙台田植	奴田植系	0
	役人田植系	1
	秋保系	5
	芋沢・下倉系	2
黒川系		3
加美・古川系		6
登米系		2
気仙沼系		2
計		26

宮城の田植踊 注(1)文献より
薄字・下線は早乙女・奴田植。



秋保一湯元の田植踊

乙女3

- ・仙台市青葉区大倉役人田植踊はエブリスリ1、弥十郎3、早乙女6
- ・気仙沼系田植踊は弥十郎2、ヤッサカ5。昭和初期まで早乙女がいた。

主役は手太鼓(鞆鼓)を持つ、躍人やくにんや弥十郎、ヤッサカで、早乙女はあまり目立たない。エブリスリらが持つ、エブリは田植え前に行う田の整地作業(代か



大倉の役人田植踊

エブリスリ(左)と弥十郎・早乙女(右)

き)の仕上げで田面をならす農具である。また、「弥十郎」はかつて集落の協働作業として行っていた田植え分担者の「ヤンジロ」である。協働作業では「苗どり・苗はこびのほか、クワガシラ(鋤頭)・ソウトメ・ヤンジロ(弥十郎)・弁当はこびと役割をわけ」、「ヤンジロはテシロマンガで田面をなおしたり、肥料を満遍なくばらまくなど、何かと気を配る老巧のもの」のことで田植踊りの主役ともなっている。クワガシラは田植のリーダー」であった(2)。

(2) 江戸時代、仙台城下の田植踊

(a) 弥十郎・奴田植から弥十郎・早乙女田植が生まれる

仙台の国学者、保田光則が万延元年(1860)に著した『新撰陸奥風土記』に「(現代語訳)仙台城下にて田植とて正月中卑賤ひせんの者大勢集いて、人々の門に入、わざをき(俳優)をなし、米銭ずきんを乞うべにおしろい。紅粉を塗りて髪も衣服も女の装いをなす者を早乙女という。男の面をかぶり頭巾をいただく者を弥ん十郎という」、「胆沢郡辺にて田植踊あり。是を紅粉を装い、又、面をかぶる事なし。もつとも古雅こがなり」とある(3)。仙台城下の紅おしろいをした早乙女、面を付けた弥十郎より、胆沢郡辺の田植踊は古くて雅としている。江戸時代中期に東北地方を旅して、その日記を残した菅江真澄は天明6年(1786)正月18日、現在の岩手県奥州市胆沢区小山で田植躍を見た。そこで当時、行われていたのは、奴田植と早乙女田植で、奴は銭太鼓で囃わけてしていた。ちなみに現在の楽器は手太鼓(鞆鼓)である。

「(現代語訳)笛つづみを吹き、鼓つづみを打ち鳴らし、また銭太鼓とて、檜曲わけてに糸を十文字に引渡し、その糸に銭を貫て是をふり、紅い布の鉢巻わけてきをしたるは奴田植といい、菅笠

を着て女の様をするは早丁女田植といえり」(4)。

江戸時代においても、胆沢あたりの田植踊は古いものとされていた。現在の弥十郎・奴田植系である。

(b) 仙台城下で行われていた田植踊

江戸時代、仙台藩は仙台城下で行われる正月の田植踊の人数等について、何度か制限を行っている

享保9年(1724)12月「公儀御触御国制禁」(5)

「一 宿守等正月渡世として田植仕候義一組に惣人数拾人までは苦しからず候、拾人以上は相控させ申す可き事 但かぶき等に紛れ候様成る義は仕らせ間敷事」

城下の田植踊は宿守が興行権を所有していた。宿守は武家屋敷に置かれた借家人で、「門の開け閉めや屋敷内外の掃除」などを行う人のことである(6)。享保9年(1724)12月の制限は、田植踊の人数を「拾人まで」とした。

ところが12年後の元文元年(1736)12月に5人に減らした。

元文元年(1736)12月「公儀御触御国制禁」(7)

「一 田植は正月に限り候、二月に成り在々へ罷り下り田植致し候義相止む可き旨仰渡され候事 但田植人数先年十人限仰渡され置き候処、向後は五人を限る可き旨仰渡され候事」

元文元年(1736)12月以降、仙台城下の田植踊は5人のままである。嘉永2年(1849)の「仙台年中行事大意」に弥十郎1・早乙女2・岡の衆2の5人による田植踊りの一行が描かれている(8)。

元文元年(1736)12月以降は5人による弥十郎・早乙女田植である。その前の享保9年(1724)12月、10人に制限される前後の田植踊は弥十郎・奴田植と思われる。廃絶した仙台市泉区の奴田植は28人(9)、仙台市青葉区大倉の役人田植踊は10人である(10)。これらにより、享保9年(1724)12月前後に仙台で行われていた田植踊の様相を窺える。

(c) 仙台城下の田植踊(弥十郎・早乙女田植踊)が在郷へ波及

仙台市青葉区芋沢の田植踊は弥十郎・早乙女田植踊芋沢・下倉系である。ここでは仙台城下の田植踊を伝えた伝承が2種ある。一つは寛延2年(1749)とする(11)。

「この田植踊りは往昔京都御所に催されたるを永正年間(1504~1521)伊達家第拾三世尚宗公朝廷の許しを仰ぎ、毎年正月二日、金子一両白米壹石を与へて居館に踊らしめ、その後、仙台築城成るや城内に踊らしめたるものなり。後、寛延二年(1749)、吉村公(12)の許しを得て国分芋沢元上郷においてこれを踊り初む。芋沢字要害の百姓喜太郎・弟平吉の兩人その元祖たり。現は七代千田庄左衛門に及び旧正月作祭として踊を例とす」。

もう一つは文化年中(1804~1818)とする(13)。

「【大澤村】古来山間の僻村にして他の交通稀なるを以て娛樂の道なきが為の故にや、

文化年中(1804~1818)、仙台立町に丸宮なるものあり、京都より田楽師を^{へい}聘し^{やんじゅうろう}笛太鼓にて囃し多くの舞子(早乙女・田 駿)を引率し、正月2日より3月3日に至る迄、^{たいけ}仙台大家、歴々の門戸に出入し田植躍りと称し豊年を祝したり。其際に当り芋沢上組に千田喜太郎・同平吉といふ兄弟あり。村内遊芸家を以て目せられ、故に其のものをして其技を^{まなば}学しめんとするも^{ゆる}聴されず。故に日々其後^{そのうしろ}へに^{ずいじゅう}随従見物し、其技を見取り、帰宅、練習すること数月にして^{ようやく}漸く熟達したるを以て村内の青年輩^{こうし}に授け、正月農休み中の娯楽とせり。即ち田植躍の嚆矢なり。

仙台北下の田植踊を芋沢に伝えたのはいずれも千田喜太郎・平吉兄弟とするが、その年代は寛延2年(1749)と文化年中(1804~1818)がある。文化年中説が書かれたわずか6年後に寛



仙台北下の大田植 注(14)文献より

弥十郎の前幌(前掛け)に蟹紋。

延説が出ているので、根拠の出所は同じ関係者であると想定され、文化年間説が長らく伝えられていたのではないかと思われる。

仙台北下の田植踊はいくつかあり、弥十郎1人、早乙女2人、岡の衆2人の5人編成が最も大人数で、これを大田植^{おおたうえ}といった。大田植は三組あり、「一ツは^{かぶたうえ}蕪田植とて蕪の紋を付る。又蟹^{かに}といふは蟹の紋をつくるなり。又海老といふは、^か苺びのものなり」として、蕪組の「大田植」が描かれている(11)。

2 歌舞伎・謡曲と弥十郎・早乙女田植

仙台藩は公式には歌舞伎の上演を禁じていた。先に見た享保9年(1724)12月の史料に歌舞伎に触れたところがある(15)。10人巳上は控えることの但し書きで、「かぶき等に^{まぎ}紛れ^{そうろうさま}候^ぎ様成る義は仕らせ間敷事」としている。歌舞伎に紛れて10人以上で田植踊をしてはいけないということであろう。歌舞伎は享保9年(1724)12月以降に禁じられ、さらに、宝暦2年(1752)までには、腰に面をつける「はさみ人形」の人形浄瑠璃として上演されるようになった(16)。以後、何度かの禁制を経て幕末まで、「歌舞伎は相成らず、

人形操の申し立てにて候間、江戸より(歌舞伎)役者が参り候ても、こし(腰)へ人形の面を附ケ」て上演された⁽¹⁷⁾。

(1) 芋沢・下倉系及び黒川系

(a) 前唄「一景開いて世もしづか・・・」と問答

芋沢・下倉系と黒川系は三番叟^{さんばそう}(芋沢)・いいけい(下倉)、前唄(大沢)・くどき(富谷)・問答(羽生)から始まる。名称は各々だが、最初に唄われる歌は「一花開いて世もしづか げにおだやかな 年の春」で共通する。元歌は謡曲「芭蕉」の「しかれば一枝の花を捧げ、御法の色をあらはすや 一花開けて四方の春」である⁽¹⁸⁾。「四方の春」で新年を表わし、花が一つ開くのを見て春の訪れを知る意である。

前唄	早乙女	弥十郎	早乙女	弥十郎
やづ○	○	○	か相○	い○
かか一	これ	デ	か変こ	ま誠
なへ景	れ申	ナ	さわれ	すにも
アへい	す	デ	んら申	わも
年ヨち	弥	ナ	せす	い
のヨい	十	モ	へソ駒	な
春イけ	郎	テ	サをい	こり
ヨい開	さん	ヤ	ソはね	や
いけて	へ		ウやん	こう
に世			め	で
おも			て	ござ
だし			代年	
			をも	

芋沢の田植踊の三番叟の前唄と問答

この歌は安永・寛政年間(1772~1801)に仙台城下の田植踊を記した「挿秧扇舞」(『仙臺始元』)でも「先つ祝す」として「一花開く処、四方静か也」と唄われ、次いで弥十郎と早乙女等の問答がある⁽¹⁹⁾。

早乙女「これもしや、弥十郎さんやのう(古礼孟奢、野牟住郎賛為農)」。

弥十郎「のなのなのな、のなもっしや(乃奈乃奈乃奈、乃奈没奢)」。

早乙女「当年も毎年にかかわらず駒が駆け来りて代搔きさんせいこのう(当年不改毎年、胡馬駆来、賜路嘉賀賛清農)」。

弥十郎「これもっしや、岡の衆(古礼孟奢阿歌之衆)」

岡の衆「やとやと(耶答耶答)」

弥十郎「これもっしや、はや早々植えられそうらい(古礼模辞媽囉裴粧播礼奏来)」。

芋沢・下倉系と黒川系でもこれに似た問答が行われ、安永・寛政年間(1772~1801)に仙台城下で行われた田植踊の前唄と問答によく似る。

(b) 獅子舞(石橋)

芋沢・下倉系では「石橋」^{しやつきょう}、黒川系で「作狂」^{さくきょう}という獅子舞があった⁽²⁰⁾。現在は行っていないことが多いが下倉では2頭の獅子を早乙女のうちの2人が演じた⁽²¹⁾。「獅子役」の早乙女は「頭に二枚重ねの“扇笠”をかぶる。“扇笠”から赤い髪が豊かに垂れて獅子に擬している。余芸なので右肩脱ぎにし、左手に「手獅子の小さな獅子頭」を持つ。獅子頭からは黄色い布が伸び、その先に付いた小鈴を右手にとって舞う⁽²²⁾。



下倉の田植踊の獅子舞(石橋) 注(21)文献より

扇を二枚重ねた“扇笠”をかぶるのは歌舞伎の獅子舞である相生獅子や枕獅子と同じである。

歌舞伎(長唄)「石橋」原文	1	2	3	4	5	歌舞伎(長唄)「石橋」訳文	1	2	3	4	5
	ぎん みぎん ○獅子団 (砌)獅子 団乱旋の 舞楽のみ	○獅子頭 の獅子	○牡丹の花 房(はなぶ さ)にほ い充	○打てや 囃せや (牡丹芳 (ぼたん ぼ)	○花に戯 れ枝に 伏し 勢ひ な		○万歳(ば んぜい) 獅子の 座に 直り けれ	○万歳(ば んぜい) 獅子の 座に 直り けれ	○獅子・ 団乱旋 (獅子・ 團乱旋 の舞楽 の名)	○牡丹の 花房も 芳しい 匂い を満 たす	○牡丹は ます ます 花を開 いて 香り も
芋沢の田植踊(仙台市青葉区)	石橋					下倉の田植踊(仙台市青葉区)	石橋				
○頭を ふり て獅子 虎乱の 舞角	○牡丹の 花房 にお いも にぎ	○牡丹の 花房 にお いも にぎ	○牡丹の 花房 にお いも にぎ	○牡丹の 花房 にお いも にぎ	○牡丹の 花房 にお いも にぎ	○頭を ふり て獅子 とら ら	○牡丹の 花房 香も 満々 大金	○牡丹の 花房 香も 満々 大金	○牡丹の 花房 香も 満々 大金	○牡丹の 花房 香も 満々 大金	○千秋 万才 と願 い かな はせ

獅子舞(石橋)の歌詞 注(23)文献より

獅子舞の歌は能(謡曲)「石橋」と同じで⁽²³⁾、難解な語句が連なった歌詞である。同じ歌詞は歌舞伎(長唄)で行われる獅子舞「相生獅子」や「枕獅子」等⁽²⁴⁾、女形が肌脱ぎして扇笠をかぶり獅子の狂いを演じる際の歌で、田植踊で行われた獅子舞の歌詞・芸態の源がここにある。

(c) 三枘紋

黒川系の大沢・富谷・羽生の田植踊は定紋に「三枘上紋」を用いている。大沢は仙台藩二代藩主伊達忠宗(1600~1658)がその優れた芸をたたえ、伊達家の家紋である「竹に雀」にちなんだ裾模様と「三重枘に上」の紋を使うことを許されたという。

大きさの異なる3つの枘を入れ子にしたこの紋は、三枘紋といわれ、歌舞伎の名門、成田屋(市川一門)の定紋で、初代市川団十郎(1660~1704)が考案したとされる。

黒川系の定紋は隅立で色を白・赤・白、中央に「上」字を入れ、独特の形にしているが、黒川系と獅子舞等に見える歌舞伎とのつながり、さらには初代団十郎が多賀城の出身であるとの噂を考えると市川一門の三枘紋を参考にした可能性が高い。

江戸時代後期の古今の書物に書かれた記事を抜き書きした冊子に初代市川団十郎(鰻蔵)の多賀城出身説が見える。

「陸奥坪の碑の近きにわたり市川村といふ所あり、その浦にて捕海老を役者鰻とよべり、こは芝居役者市川鰻蔵が生まれし里なり」⁽²⁵⁾

また、仙台北城下に御くに団十郎こと市川今五郎という役者がいた。

「仙台北城下に釈迦堂といふ有り。繁昌なる所にて、寺内に定芝居あり。常に江戸の戯者も往来して芸をのぶる所也。その土着に市川今五郎といふもの芝居の魁首にして、せんだいにては御くに団十郎と号す」⁽²⁶⁾。

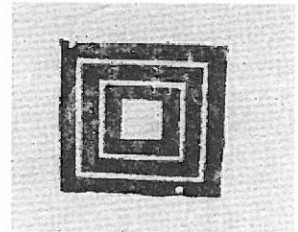
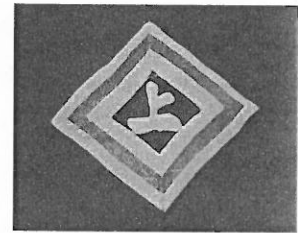
釈迦堂は、祭日前後に芝居上演が公認された、仙台北城下の「六ヶ所神事場」⁽²⁷⁾であるが、この史料が記された天明5年(1785)頃は常設であったらしい。

黒川系の「三枘上紋」に対して、秋保系は「蕪紋」である。仙台北城下は「蕪紋」の他、「蟹紋」、「海老紋」を定紋とする田植組が出ていた。黒川系はこのどちらと関連が深いのであろうか。

(2) 秋保系

(a) 入羽(本芸)

弥十郎・早乙女田植のうち秋保系は演目の最初に「入羽」があり最後に「上がりはか」となる。長袋の田植踊の「入羽」は「前歌ともいふ。つぼめたままの扇子一本を持って



三枘紋

大沢の田植踊(上)と市川団十郎家(下)

踊る。はじめ花道から踊りながら出てくる。さうして舞台に一行、若しくは二、三列に並んでしまふまで踊をつづける」というものである⁽²⁸⁾。

「上がりはか」の「はか」は田植えや稲刈りで、わり当てられた一人の仕事の持ち分、分担範囲をさす。田植でいえば「植える分担の仕上がり」という意味である。この「はか」は奈良時代の「萬葉集」にも詠われている⁽²⁹⁾。

「入羽」は「入端」とも書く舞踊用語で「民俗舞踊で、出端、中端、入端という仕組のうち、最初の登場の際に行われる舞踊の部分を用いる。「端」は「羽」とも書く。また逆にこの部分を「入端(羽)」ともいう例も多い」⁽³⁰⁾。

秋保系の本芸で最初に踊られる「入羽」は舞踊用語に起源がある。最後の「上がりはか」は稲作用語であるから、自然な形で対になる言葉ではない。秋保系は後述するように、田植踊の舞台が普及する。その中で、舞台において最初に行われる踊として地芝居の影響を受けて「入羽」という言葉が生まれたと考えられる。それ以前は長袋でいう「前歌」であったのであろう。門付けから、舞台で行われる田植踊に成長した秋保系にふさわしい言葉で再編成されたのである。

(b) 誉め言葉

田植踊の際中に見物客から、踊りや衣裳などを賞賛する「誉め言葉」がかかると、踊子は踊を止めて座り、客の口上を拝聴する。これが終わると踊中が『返し言葉』を述べる。ほとんどの秋保系にあった。

歌舞伎でも江戸時代に一時、舞台上の演技を中止して、定められた観客が花道に上がり、役者をほめる「ほめ言葉」があった。例として「湯元の田植踊を上げる。

「しんしばらく しばらく一、しばしとどめし拙者には、磐司が下の蛙めで、米の成る木を知りたさに、笛や太鼓の音聴いて此処まで推参つかまつる。ほめる言葉も知らねども、余りおん田植の面白さに、チョットほめまんしょ、ほめまんしょ、ほめて仮名ちがいや、ほめちがいは御免なあれ、

先ず、弥十郎を始めとし、浅黄の頭巾に鈴を下げ太平袖にかぶの紋、鈴のなる音を聞きもせば、秋の夕暮軒下で、鈴虫声や、くつわむし、世はまん丸く丸くけの、帯きりチャンと前にしめ浅黄の股引はきしめて、前に下げたる前ぼろは、波に兎の縫ちらし、踏み出す足は八文字、

後に並びし早乙女のかぶりし花笠見申せば、絹羽二重に裾模様、筑前博多の帯しめて、後に矢の字に結ばれて、腰に下げたる腰ひもは金のように下けたよだ。みな一様に白地の足袋をはきしめて、踊る姿を見申せば、小野小町か照手姫、(中略)四海の波もおだやかに……余り長きは御大勢、御見物様方のおん妨げ、ところは千秋万歳万々歳、あら面白やとほう敬って申す」⁽³¹⁾

歌舞伎で語られた「誉め言葉」は〇〇づくしが多い。その例を以下に示す⁽³²⁾。

「(天満宮菜種御供 ^{てんまんぐうなたねごく} 安永六年(1777)四月十五日より大坂小川吉太郎座上演)

小川吉太郎 川づくし

しばらくしばらく、重かさねて誉詞、せみの小川の流より、清き諸げいをみたら
 しや、名は高埜川宇治川のしやれ(洒落)けもなくてきつはりと、大手大井の川なみ
 も、とんとんしやんしやん馬入川、口跡までもよしの川、あたかも川のぬれ事は 手
 に入間川愛染あいぞめて川いらしと娘気に、ほれた田上野洲野洲と大和の川や、もろこし迄
 ひいきおしを(鬮眞小塩)の川ぎしにならぶ、岡川手びやうしの音羽の川のおとらぬ
 は京と にはは(浪華)やいなかは(猪名川)迄見に野守川よど川の水に、映へあふや
 つしがたとホホウやまつてもふす」

(c) 舞台

誉め言葉は家々を廻る門付けで行われるのではなく、大勢の観客が詰めかけた舞台上で行われる、演者と観客が一体になったパフォーマンスである。

田植踊は正月に家々、あるいは集落の主たる家、事前に招待された家などを訪れて、屋敷の庭で行うのが一般的で、仙台北下の田植踊はこうした門付け芸能であった。仙台市太白区の秋保街道沿いやその北、旧宮城町の作並街道沿いの集落は、門付けが終わった1月下旬や2月にかけて、近隣で行われている田植踊を泊まり付きで招待していた。その「招待芸能の記録」は文久4年(1864)から大正12年(1923)まで15回分が招待集落に残っている⁽³³⁾。秋保では宿元に当たった家の「縁側から張出し舞台(間口十五間[約27m]、奥行七間[約12.6m]、臼を重ねた上に板を敷並べ屋根を葺く)や花道」を設けた。これほどの大きさでなくても、間口五間[約9m]、奥行三間[約5.4m]はあったという。人々は庭にゴザを敷いて見物した。「誉め言葉」はこうした場所で披露された。

江戸時代、仙台北下の芝居(操芝居)は「六ヶ所神事場」⁽³⁴⁾で、祭礼日を中心に晴天時10日ずつ行われた。しかし、先に見た通り、天明5年(1785)頃に書かれた記録「譚海」に、「六ヶ所神事場」の一つ、釈迦堂は「寺内に定芝居あり」と出ている⁽³⁵⁾。この頃には藩の規制が緩んでいた可能性がある。「藩政時代後期になると関西歌舞伎などが城下や周辺の在郷村にも興行され、城下には歌舞伎役者も定住していたらしく、芝居好きの農民たちが芝居の先生を招いて習ったもの」で、「村々には地芝居の一座も現れて村の祭りに仮設の大舞台を組んで歌舞伎の真似事を演じ」た⁽³⁶⁾。幕末の民衆のパワーはこれまでの仙台藩の芸能禁制を吹き飛ばしてしまったようだ。秋保系の田植踊が舞台上で演じられた(p13の表参照)のはこうした状況を反映したものであろう。田植踊の「誉め言葉」は歌舞伎のほめ言葉を参考に、秋保系で舞台芸能の一つとして定着した田植踊の余芸である。

3 弥十郎・早乙女田植の本芸と余芸の再編成

江戸時代に仙台北下で行われた弥十郎・早乙女田植は前唄、問答の後に本芸として早乙女による田植の踊りが行われ、その後、余芸として歌舞伎由来の狂言等が行われた。そのことを示す、安永・寛政年間(1772~1801)の史料「挿秧扇舞」を再び見る⁽³⁷⁾。

まず、「一花開く処、四方静か也」の前唄があり、その後には弥十郎と早乙女、それに岡の衆による問答がある。次いで、踊跳、鼓・笛に合わせた青陽那、壮麗哉の歌になる。この歌に合わせて本芸の田植の踊りが行われたのであろう。その後、以下になる。「(現代語訳)(本芸の)曲が罷りおわりて魚売人、愚嬌、客贗乳婆の数種の狂言を作す。これらは狂へおどけたもので、視る人を絶倒させる。(中略)終わりに臨んで、祐成時致すけなりときむね日本孝子、景清かげきよ日本忠臣、が行われ、舞が終わると、全ての終わりとして跳鼓たいこの曲を演じた。最後に野牟住郎やむじゅうろうが主人に礼をして、「君家千秋万歳くんかせんしゅうばんぜい(ご主人の家は千年も万年も続き)、歡無疆かんむきょう(おおいにおめでたいことです)」と言い、太鼓を鳴して去る。

「魚売人」は、文化10年(1813)に初演された、「四季詠高しきのながめよせてみ つだい三ツ大」という十二変化物の歌舞伎舞踊に「(長唄)いさみ商人かつおくり(松魚売)」がある(38)。「挿秧扇舞たうへおどり」はこれよりも古いので、十二変化物に構成される前のものか。「愚嬌ばかむこ」、「客贗乳婆にせうば」は残念ながら不詳である。「祐成時致すけなりときむね」は鎌倉時代に曾我十郎祐成と五郎時致の曾我兄弟が、父の仇である工藤祐経くどうすけつねを討った物語を題材にしたもので、曾我物と呼ばれる多くの作品がある。「景清かげきよ」は平家物語に登場する藤原景清だが、物語の主演としては描かれていない。しかし、歌舞伎では、源頼朝への復讐に燃える平家の忠臣として仕立てられ人気がある。

「跳鼓はねたいこ」は芝居小屋の檣やぐらの上で閉場などを知らせるために打つ太鼓のことで、まさに芝居の「全ての終わり」を知らせるものである。

「挿秧扇舞たうへおどり」では苗を植える所作を踊る本芸のあとに歌舞伎由来の余芸があり、田植踊の終わりを告げる跳ね太鼓を打ち、弥十郎が礼と祝福の言葉を述べて太鼓を鳴らしながら去る。ここでは本芸と余芸がはっきり区別されている。

黒川系は「前唄」で新年の訪れを告げ、「問答」で生命力に富んだ苗を植える所作(豊

「挿秧扇舞」(1772年~1801年)		黒川系		秋保系			
				湯元・長袋・馬場	新川・愛子		
前唄	一花開く処、四方静か也。	本芸	田植えの所作踊	本芸	口上(弥十郎)		
問答	弥十郎と早乙女、岡の衆。					本芸 (入羽→○→ 誉め言葉→○ →跳ね太鼓→ 上がりはか)	本芸 (入羽→○→ 誉め言葉→ ○→跳ね太鼓)
本芸	踊跳、鼓・笛で青陽那、壮麗哉。						
余芸	狂言(魚売人・愚嬌・客贗乳婆)。曾我物・景清。					御礼	
終了	跳鼓で総尾を賀す。						
御礼	主人に御礼、祝福を述べ、太鼓を鳴らし去る。						

「挿秧扇舞」と仙台の田植踊の本芸と余芸 薄字は余芸。

饒をもたらず所作)を伝え、田植踊の本芸を行う。最後に「石橋」で、獅子の霊力で世の中すべてが泰平となったことを慶ぶ。また、「(獅子は)千秋万世と願いを叶わせられ給う」と「挿秧扇舞^{たうへおどり}」の弥十郎に似た祝福が述べられる。この前段(前唄・問答)、中段(田植の踊り)、後段(石橋^{しゃつきょう})の再構成は余芸の衰退に契機があるかも知れないが、舞台芸と関連するものでなく、門付けの芸が踏まえられている。再編成以前は「挿秧扇舞^{たうへおどり}」に近い構成と思われる。

芋沢・下倉系の芋沢は昭和9年のラジオ放送で「石橋」のあとに「上がりはか」を演じている⁽³⁹⁾。下倉も「石橋」のあとに「上がりはか」で、次に述べる秋保の田植踊と同じである。

秋保系は全てに「はね太鼓(馬場：太鼓田植)」がある。もとは余芸であったが、現在は本芸の中で行われる。馬場・長袋・湯元の秋保の田植踊は最初に「入羽」、最後が「上りはか」で、「はね太鼓」はその前に演じる。作並街道沿いの新川と愛子は最初に「入羽」、最後が「はね太鼓」で、「上りはか」は演目になり、「誉め言葉」が本芸の途中に入るのは共通する。



はね太鼓 愛子の田植踊 注(21)文献より
左右に分かれて唄に合わせて太鼓を打つ。本芸と区別し、頭の花笠をとって行う。

現行の秋保系は舞台で行う芸能であることが基本にあるが、それ以前の門付け期、さらには舞台最盛期、舞台衰退期等に応じて、構成・人数等の再編成が行われて来たと考えられる。現在は舞台衰退期後の再編成である。これは本芸を重視した形になっている。その状況の解明は今後の課題としたい。

注

- (1) 千葉雄市「田植踊」「宮城県の民俗芸能(2)」『東北歴史博物館研究紀要2』2001年p51
- (2) 竹内利美『日本の民俗 宮城』第一法規出版株式会社1974年p49
- (3) 保田光則1860年『新撰陸奥風土記』歴史図書社1980年p63・64
- (4) 菅江真澄1786年「かすむこまがた」『菅江真澄全集第1巻』未来社1971年p334・335
- (5) 近世村落研究会編『仙台藩農政の研究』丸善1958年p330
- (6) 鯨井千佐登「城下の生活」『仙台市史通史編4 近世2』2003年p346
- (7) 注5文献p330
- (8) 十返舎一九1849年「仙台年中行事大意」『仙台年中行事絵巻解説附仙台年中行事大意』1940年p6・7
- (9) 泉市誌編纂委員会編『泉市誌下巻』泉市1986年p408
- (10) 宮城町誌改訂編纂委員会編『改訂版宮城町誌(本編)』仙台市1988年p927・928

- (11) 河北新報「(JOHK 今日の番組 俚謡 作祭田植踊」『河北新報 昭和9年(1934)2月16日刊』p 5
- (12) 1743年仙台藩五代藩主隠居、1752年死去
- (13) 宮城郡教育会編 1928年『宮城郡誌 全』名著出版<復刻>1972年 p1187・1188
- (14) 注8 文献 p 5
- (15) 注5 文献 p 330
- (16) 仙台市博物館蔵「宝暦大留自紀」『河田家文書』宝暦二年九月廿日文書別紙書立、引用は水野沙織「宝暦年間の興行事情」『市史せんだい vol.13』2003年 p 78・79
- (17) 船遊亭扇橋「奥のしをり」1841年『復刻奥のしをり』アチックミュージアム彙報第21、1938年 p 3
- (18) 野上豊一郎『新装愛蔵版 解註謡曲全集巻二』中央公論社 1984年 p 330
- (19) 白石爛兮「挿秧扇舞」『仙臺始元』安永・寛政年間(1772~1801)、玉蟲尚茂『東藩事物紀源』宮城県図書館所蔵 1950年(写) p 144
- (20) 千葉雄市「獅子舞」「宮城県の民俗芸能(2)」『東北歴史博物館研究紀要2』2001年 p 49・50
- (21) 千葉雄市「正月予祝の田植踊」『仙台市史特別編6 民俗』仙台市 1998年 p 506
- (22) 千葉雄市監修『下倉の田植踊』下倉田植踊保存会 2004年 p 15・17・21
- (23) 野上豊一郎編「石橋」『新装愛蔵版 解註 謡曲全集巻6』中央公論社 1985年 p 397・398
- (24) サントリー美術館編『歌舞伎座新開場記念展歌舞伎 江戸の芝居小屋』2013年 p 114
- (25) 高田与清「役者海老」『松屋筆記巻四』市川謙吉編輯兼発行 1908年 p 27
文化末年(1818)から弘化2年(1845)に記された書物の記事を抜き書き、考証したもの。
- (26) 津村正恭「譚海」1785年『日本庶民生活史料集成第8巻見聞記』三一書房 1969年 p 73
- (27) 河田矛嘯「奥陽名数」1845年『宮城縣史 32(資料篇9)』宮城縣史刊行会 1970年 p 92
- (28) 本田安次「秋保村長袋の田植踊」『本田安次著作集 日本の傳統藝能第八巻田楽 I』錦正社 1995年 p 254・255(調査:昭和6年)
- (29) 佐竹昭広他校注「巻第十 秋の雑歌 2133」『万葉集(三)』岩波文庫 2014年 p 182。
「秋の田の 我が刈りばかの 過ぎぬれば 雁が音聞こゆ 冬かたまけて(秋の田の私の刈り場が終わった頃には雁の声が聞こえる。冬が近くなって)」
- (30) 郡司正勝編『日本舞踊辞典』東京堂出版 1977年 p 267・268
- (31) 小田嶋利江「湯元の田植踊」「秋保の田植踊」の歴史と現在』仙台市文化財調査報告書第431集 2014年 p 214
- (32) 松崎仁「『新板役者誉ことば』影印・翻刻と注解」『日本文学研究 27』梅光学院大学 1991年 p 79
- (33) 千葉雄市「仙台在郷村落の芸能招待交流について」『東北民俗』第28輯 1994年 p 29
- (34) 注27 文献 p 92
- (35) 注26 文献 p 73
- (36) 注33 文献 p 31
- (37) 注18 文献 p 144
- (38) 伊原敏郎著、河竹繁俊・吉田暎二編集校訂『歌舞伎年表第五巻』岩波書店 1960年 p 515
- (39) 注11 文献 p 5

総番	現番	区分	系統	市町	指定	名称	エブリスリ	弥十郎	鞆鼓	奴	鈴振	早乙女	口上(一花)	獅子舞	定紋	誉め言葉	舞台	地芝居			
1		弥十郎・奴田植	奴田植系	仙台市泉区		実沢桐ヶ崎	1	2	8 (躍人)	12	3 他に馬役2										
2					実沢上の原																
3					実沢中																
4					去田																
5					小角川東																
6					根白石銅谷																
7					根白石村崎																
8					根白石上の宿																
9	1	役人田植系	仙台市青葉区	県	大倉	1		3			6				蕪紋	◎					
10	2	弥十郎・早乙女田植	秋保系	仙台市太白区	国	湯元		2			2	8~20			蕪紋	◎	(◎)	◎			
11	3					長袋		2		2	8以上			2	8以上			蕪紋	◎	◎	◎
12	4					馬場		2		2	8~20			2	8~20	春駒(馬)		蕪紋	◎	◎	
13						境野														◎	
14						国久															
15						竹之内															
16						石神															
17						白沢															
18						並木															
19						野中															
20				賀沢																	
21	5			仙台市青葉区	県	新川				2			2	6~8	ささら(獅子舞)		蕪紋	◎	◎		
22	6			仙台市青葉区	県	愛子				2			2	6以上			蕪紋	◎	◎		
23				川崎町		作並									獅子舞		蕪紋	◎	◎		
24				川崎町		本砂金															
25	7			芋沢下倉系	仙台市青葉区	県	芋沢			2				10(男)	◎	石橋(獅子舞)		丸に宮紋			
26	8					県	下倉					4			6~7	◎	石橋(獅子舞)		蕪紋	◎	◎
27						苦地															
28						大手門															
29						矢籠															
30		定義																◎			
31		仙台市泉区	県		西田中																
32					福岡菅ノ崎																
33					福岡藤沢															◎	
34					根白石町															◎	
35	9	黒川系	富谷市	県	大沢			2				4(男)	◎	作狂(獅子舞)		三拵上紋		◎			
36	10			県	富谷					2(1)			5(2)	◎	作狂(獅子舞)		三拵上紋				
37				熊谷																	
38				穀田																	
39				一ノ関																	
40				二ノ関																	
41				三ノ関																	
42	11	大郷町	町	羽生				2				5	◎	作狂(獅子舞)		三拵上紋					

仙台の田植踊 現行 11、廃絶 31、網掛けは廃絶。泉区の廃絶分を芋沢下倉系に入れたのは推定。

